管啓次郎　詩人

本が土地から生えてくるとしたら、書店は森。現実には本はどれも遠くから旅をしてくるので、たぶん鳥やりすのような小動物が運んでくるのだと考えればいいのかもしれない。書店は果樹の森のように土地にある。この数年いくつかの理由があって八戸が大好きな町になったが、その中心には小さな本の森としての八戸ブックセンターがあった。わたり鳥が一時滞在する場所を求めるようにして、ぼくはそこに来た。そして八戸を本のように読みはじめ、その読書はいまもつづく。

書店で立ち読みをすることは子供のころからの習慣。もちろん、お店の迷惑になるようなことはしません。気になる書棚の本を抜き出し、ぱらぱらと拾い読みし、いくつかのことばを記憶にとどめ、何冊かのうちの一冊を購入して、野原でみつけた鳥の卵を大切にもち帰るような気持ちで書店を離れる。そのくりかえし。ぼくは世界のあらゆる書店の本棚はひとつにつながっている、横へ横へと歩いてたどるうちに現実に世界一周の旅が成就するという考えの持ち主だが、そんな旅の中でもいくつかの書店は、とりわけ心を誘い、滞在を呼びかけてくる。八戸ブックセンターのよく考えられ整えられた空間に、ぼくは山野に放たれた小動物のような気持ちで飛び込み、たちまちなじんだ。

八戸との関わりを作ってくれたのは小説家の木村友祐。彼のデビュー作『海猫ツリーハウス』に感動したぼくは、やがて彼と知り合い、彼の兄・木村勝一が作る現実のツリーハウス群を体験しにいった。そこからぼくの八戸がほんとうにはじまった。ついでこのブックセンターができて、2016年のオープニング・イベント「土地と声」に友祐、温又柔、石田千とともに参加した。翌年には小説家の古川日出男たちとやっている朗読劇『銀河鉄道の夜』の八戸公演を行った。いずれも強烈な思い出で、その熱はよく伝わったと思う。

2018年の夏の数日、ぼくはブックセンターのブースにひとり閉じこもり、八戸出身の詩人・村次郎の作品を読みつづけた。フランス文学を学んだあと、ひとりしずかな声の抒情詩を書きついでいた彼の詩に、ずいぶん遅れてやってきた読者として対面し、デザイナーの五十嵐哲夫さんと組んで選詩集を編んだのだ。その結果生まれたのが『もう一人の吾行くごとし秋の風』で、これは八戸ブックセンター企画「紙から本ができるまで展」と連動するかたちで実現した、あらゆる面で非常に水準の高い、詩とデザインのプロジェクトだった。

その後パンデミックに強いられた停滞の年月があったのはいうまでもないが、そろそろ活動再開にはいい時期。ちょうど昨年暮れ、八戸で活動した思想家・安藤昌益の『自然真営道』講談社

学術文庫版のために、ぼくはエッセーを寄稿した。身分社会をとことん嫌悪し、土にふれて生きることを説いたこの風変わりな町医者の思想は、二世紀半を経て現代に甦ってしかるべき重要な考え方だ。この種子を育ててみようか。鮫から種差海岸まで一緒に歩きながら、そんなことを話し合ってみませんか。

管啓次郎　keijiro suga

詩人

オープニング記念イベント「土地と声」(2016)
「紙から本ができるまで展2018 村次郎×管啓次郎×五十嵐哲夫×三菱製紙八戸工場」(2018)
など

1958年生まれ。明治大学理工学研究科新領域創造専攻教授。2011年『斜線の旅』(インスクリプト)で読売文学賞受賞。著書に『コロンブスの犬』(河出書房新社)、『本は読めないものだから心配するな』、編著に『もう一人の吾行くごとし秋の風』(共に左右社)など。